

氏 名	嶋 田 義 仁
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 384 号
学位授与の日付	平 成 12 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	稲作文化の世界観

——『古事記』神代神話の構造分析より——

論文調査委員	(主 査) 教 授 長 谷 正 當	教 授 藺 田 坦	教 授 藤 田 正 勝
--------	----------------------	-----------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は『古事記』神代神話の構造分析とその解釈をもとに、稲作文化の世界観を究明したものである。神話とは、概念ではなく、具体的なイメージをもった出来事や事実から成り立つ物語であるが、その物語の背景には体系性をもった構造がある。このような観点から、本論文は『古事記』神代神話の構造分析を試み、その結果、『古事記』神代神話に表現されているのは稲作文化の世界観であるという予測を得て、この予測を仮説として、稲作文化が果たして現実存在するか、その正当な輪郭は何であるかを、民俗学の固有信仰研究や宗教民族学の成果を批判的に考察するなかで考察したものである。

第一部において、上記の方法によって神代神話の基本パターンが取り出される。第一章において、従来の『古事記』研究史が概観されたのち、第二章において、古事記の構造論的分析が試みられる。まず、神代神話作論者が注目する、序文などに見られる漢文調の散文的文章や名のみ登場して具体的な行動のない神話などが、神話にとって本質的でない要素として、削りとられる。そこに神代神話の「神話的」骨格が現れるが、それはイザナギ・イザナミの国生みの神話、アマテラスとスサノヲの闘争、スサノヲのヤマタノオロチ退治、オホクニヌシのイナバの白兔神話、海彦・山彦神話などである。

論者は、これらの神話群のうちに同じパターンの神話が3回繰り返されていることに注目する。そのパターンは、「夫婦の恋愛神話(A型神話)」+「その子供の闘争物語(B型神話)」であり、その各1セットが、国生み神話を含めた高天原神話、日向神話、出雲神話で3回繰り返されている。つまり、①イザナギ・イザナミ夫婦とその子アマテラスの物語(高天原神話)と②ニニギとコノハナサクヤビメ夫婦とその子海幸と山幸の物語(日向神話)③スサノヲとクシナダヒメとその子孫オホクニヌシとヤソ神の物語(出雲神話)である。

第三章と第四章において、上の兄弟闘争が2ラウンドからなることが注目され、それが水と地の争いを意味することが明らかにされる。兄弟の闘争は、どの神話でも、各神話の主人公は最初は負けるが後には勝つという2ラウンドの戦いになっている。高天原神話はただし数代に亘る。アマテラスはスサノヲとの誓い負け天の岩戸に籠もってしまうが、孫のニニギの代にスサノヲの子孫オホクニヌシに国譲りをさせて雪辱をはたす。そして、逆転劇には必ず「助太刀」が存在するという共通性もある。山の幸は海神に助けられ、オホクニヌシはスサノヲに助けられて兄弟を打ち倒す。ニニギの天孫降臨にさいしては、タケムカツチという助太刀が活躍する。

兄弟闘争神話には、主人公が第一ラウンドの敗退の後、アマテラスの天の岩戸籠もりのように、密室に籠もるという共通性もある。海幸・山幸神話の山幸は海神の「宮室」に入り、出雲神話のオホクニヌシは「蛇ノ室」に入る。しかし主人公はかならず女性の援助を得て密室から脱出する。アマテラスの場合はアメノウズメ、オホクニヌシの場合はスセリビメ、山幸の場合はトヨタマビメが助けて登場する。

こうした兄弟闘争が意味していることは、兄弟の対立関係に注目することによって浮かび上がってくる。まず注目されるのは、高天原神話の高天原と海原、日向神話の海幸と山幸という関係の類似性である。それは、水と地の対立を意味している。オホクニヌシとヤソ神との関係も、イナバノのシロウサギ神話で印象的な「真水」と「海水」の対立に注目することで、地と水の対立として解釈される。

そして、第一ラウンドで負けるのはいつも地の側である。しかし最後には地が勝つ。しかもその際登場する助太刀の性格が第一ラウンドの勝者よりもさらに水という性格を強くもっている。つまり、各神話の地を意味する主人公は最初水に負けるが、相手の水よりもより強く水という性格を有している助太刀をえて水を打ち破るのである。

第五章では、恋愛神話は、生と死の逆転の神話を意味することが示される。恋愛神話では、国生みや黄泉、ヤマタノオロチ殺害、またコノハナサクヤビメをめぐる死の起源神話があることから分かるように、生死の関係がテーマになっている。この場合も生死の関係が逆転した形であらわれてくる。まず、生があって死があるという話があり（イザナミは国生みの果てに死に、出雲神話では生まれた子が次々に蛇に食われて死ぬ。日向神話では、ニニギが木の花の精コノハナサクヤビメを娶ったために子孫に死がおとずれる）、次には「死から生が生じる話が現れる（国生み神話では黄泉のケガレからアマテラス、スサノヲ兄弟が生まれ、一日に千人殺すと宣言するイザナミに対して一日に千五百の産屋をつくるとイザナギが宣言する。日向神話ではコノハナサクヤビメが火中で出産し、出雲神話ではヤマタノオロチ殺害によってスサノヲは豊饒の象徴のようなクシナダヒメ（稲田姫）を得る。

恋愛神話にも密室神話がある。イザナミは黄泉に去り、出雲神話では生まれてくる女兒がヲロチの胎内に飲み込まれる。日向神話ではコノハナサクヤビメが「戸無き八尋殿」に入って出てこない。

以上のことにより、神代神話の基本構造は生と死の逆転を内容とする恋愛神話と、水・地の闘争の逆転を内容とする兄弟闘争神話から成り立ち、それが3つのヴァリエーションとして、高天原神話、日向神話、出雲神話などで繰り返されていることが分かった。

では、神代神話は全体として何を意味しているのか。ここからやや大胆な解釈になるのだが、論者は、水と地の闘争神話が意味しているのは、稲作農村で毎年繰り返されてきた稲作のプロセスではないかと解釈する。稲を作るために田の水をはらねばならない。田植えの季節とともに、大地は一面水に覆われる。しかし、それゆえに、大地は秋には豊かな実りをもたらす。大地は初めは水に負けるが、最後には逆転勝利を収めてしまうかのごとくである。これを闘争としてイメージするのも、急峻な谷や盆地で絶えず水との戦いに明け暮れながら稲作を営んできたに日本人の生活に照らしてみると生活の実感でもある。

神話全体としては、こうした水地の闘争劇のアナロジーによって生死の謎に取り組んでいるように見えた。死は生の終わりなのか。否、そうではない、死があるからこそ生があるのではないか。なぜなら、見よ、大地を。地も初めは水に覆われ水に負けてしまうかの如くだが、地は水に覆われるからこそ、秋には再び豊かな実りとなって復活を果たす。人間の生死もこれと同じではないか。つまり、死があって初めて生がある。

こうした、日本人の基幹的生業たる稲作の、だれにもわかる季節変化・農耕サイクルに立脚した生死観、つまり再生復活の思想が、神代神話において表現されていると、論者は解釈する。それを神話は難しく語るのではなく、イナバノシロウサギや海幸・山幸神話のような、幼児でもわかる寓意的表現で語り続けてきた。この解釈が正しければ、この解釈に対応する諸儀礼や信仰が、農村生活のなかに生きていなければならないということから、本論文は、日本の固有信仰論を再検討する作業に入る。

第二部、第七章では、水と地の対立が考察される。これは折口や柳田のまればと論や山神遊行論に対応する。これはまた相撲の起源とも結び付いている。愛媛県瀬戸内海大三島の大山祇神社には、田植えの季節に来訪する神と相撲をとって負けるという一人相撲の神事さえある。この神は水の神であり、一人相撲は、神社の田植え祭りと抜き穂祭りの折りに神田の横でおこなわれる。有名な河童伝説、河童と馬が相撲を取るという河童駒田引の伝説も、地霊と水霊との相撲、闘争だというのが、折口などの相撲起源論である。

第八章。これまでの固有信仰論は、上のような神代神話解釈にしたがって、いくつかの点で修正される。その一つは、固有信仰論の再生復活の季節論である。フレイザーの穀霊論などの影響下柳田も、生命の死と復活が稲作のサイクルに重ね合わされていることを示唆し、その後、坪井洋文らも同じことを論じたが、大きな問題は、春を復活、冬を迎える秋を死の季節としてしまっていることである。それは稲の芽生えや田植えを復活のシンボルとし、ものみな枯れる秋冬の収穫期を死のシンボルと考えたからである。しかし、神代神話の解釈からは、田植えの季節が死の季節、秋から冬の収穫期が復活の季節ということになる。

これは、フレイザーやエリアーデの主張にも合致する。かれらは農業社会では一般に、播種が人間の死、収穫によって食

物が得られることが生命の復活になぞえられる、と考えられている。これは聖書にあるキリストの「一粒の麦もし死なずんば……」の言葉にも見られる。実際、日本の収穫儀礼をみても、収穫儀礼を生命復活儀礼とみるのが相応しい特徴が数多くある。新嘗祭もこれに入る。正月なにゆえに米からつくる餅や酒が聖なる食物とされてきたかも、このことから説明できる。

では柳田以下がなぜこのような間違いをしたか。それは日本の農耕サイクルとヨーロッパの農耕サイクルの違いを十分認識しなかったからである。冬雨の地中海季候下にあるヨーロッパの農耕のベースになるのは、冬小麦であり、秋から冬に種を蒔き、春か夏にかけて収穫する。日本の稲作の農耕サイクルとは逆である。ヨーロッパで秋から冬にかけてが死の季節になるのは（実際、11月1日はヨーロッパでは死者の日とされて、墓参りなどに行く）、この季節は播種期だからである。そして春夏が復活の季節になるのは、この季節が収穫期だからである。しかし柳田はこれを考慮せず、ヨーロッパ的世界観の季節観をそのまま日本の季節に当てはめてしまい、その後の論者もこれに追従している。

第八章。固有信仰論のもう一つの問題は、石田英一郎の『桃太郎の母』における考えである。石田英一郎は、柳田の『桃太郎の誕生』を受けて、『桃太郎の母』を論じ、水中から子供が生まれるという桃太郎伝説の背後にはかならず女性の姿がらつくが、これは、コーランにひろく広がる大地母神の信仰につながると論じている。しかし、大地母神のような畑作世界でうまれた信仰をそのまま稲作世界に当てはめるのは誤りである。

桃太郎伝説は竜宮伝説などと共に、すなわち解釈すべきである。すなわち、柳田や折口の海上他界論が示すように、稲作世界の他界は水の世界である。稲粳は水に覆われて死ぬが、それゆえにこそ豊かな復活を果たす。畑作世界で「大地母神」が問題になるのは、畑作世界では穀粒は文字どおり大地に包まれ、それによって復活を果たすからである。しかし、稲作世界では「大水母神」でなければならない。

第九章。稲作の農耕形式の特殊性に注目するならば、地母信仰とセットになって論ぜられる天父信仰も、稲作文化には存在しない。エリアーデなどが論じているように、天父神信仰は、天からの雨によって耕作をおこなう畑作農耕文化に依拠し、天父神を象徴するのは雨を降らす雷神である。柳田はこの雷神信仰が日本に存在したと主張し、神話学者たちもイザナギは天父神だとみてきた。しかし、灌漑農耕をおこなう稲作文化においては、水の獲得は天の恣意によらず人為的な努力に大きく依拠しているがゆえに、天父－雷神信仰は存在しない。このことは、柳田が雷神信仰存在の典拠としている『日本霊異記』の雷神説話そのものによって説明できる。そこには人間によって捕らえられ人間に命乞いをし、人間の作った灌漑施設の用心棒として働く不甲斐ない雷神の姿が描かれているからである。稲作文化において代わって一種の絶対性をもってイメージされてきたのはむしろ、尽きざる水源としての山、あるいは水の宝庫としての海である。これは固有信仰論において海上他界論や山上他界論が生まれてきた根拠である。

本論文は、以上のような作業を通して、水稻稲作世界に固有な、その農耕の固有性に深く結び付いた世界観を明らかにすると共に、『古事記』神代神話を日本列島で生きた一農民衆の神話として読み直す試みをおこなっている。

論文審査の結果の要旨

本論文は『古事記』神代神話の構造分析を通して、日本の固有信仰のもつ世界観・宇宙論の構造を解明し、それが日本人の生業の基幹となってきた灌漑稲作農業に立脚した世界観にもとづくものであることを明らかにしたものである。

近年の『古事記』研究は政治思想的観点やテキスト分析的観点など多様な観点からなされているが、『古事記』を八世紀における日本の政治的統合を実現するための政治思想的作品であるという見方においては一致しているといえる。しかし、そこでは神話の政治論的側面が注目されるあまり、神話の生命ともいべき具体的でメッセージ豊かな物語性は無視されてきた。本論文において論者が企てるのは、『古事記』というテキストを古代国家確立期の政治思想作品として読むのではなく、本来神話がもつべき意味に即して読むこと、つまり、具体的イメージをもった出来事や登場人物や動物によって語られた物語として読むことであり、そのような読解を通して、論者は『古事記』の神代神話に表現されているものが日本古来の灌漑稲作農業に特有の世界観であることを明らかにする。こうして、論者は『古事記』のうちに、柳田国男や折口信夫らによって確定された日本人の固有信仰の体系的表明を読み取ろうとする。本論文の独自性は、第一に、論者が本居宣長以来さまざまな仕方で読まれてきた『古事記』というテキストの読解に、宗教人類学的・民族学的な観点を導入したことであり、第二に、この読解を構造主義的な神話分析という新しい方法を用いておこなったことであり、第三に、構造主義的な神話分

析を灌漑稲作農業という民族学的な視点から裏付けるさいに、従来柳田らによって承認されてきた固有信仰論に幾つかの点で修正を加えているということである。

第一部において論者は、神代神話の基本的構造は生と死の逆転を内容とする恋愛神話と、水と地の闘争を内容とする兄弟闘争神話から成り立ち、その三つのヴァリエーションが高天原神話、日向神話、出雲神話において繰り返されていることに注目する。

そして、この生と死の逆転、水と地との闘争という形で神代神話が全体として意味しているものを灌漑稲作のプロセスと解釈する。即ち、神代神話の骨格をなすと見られる、イザナギ・イザナミの国生み神話やアマテラスとスサノヲの物語である高天原神話、ニニギとコノハナサクヤビメ夫婦とその子海幸・山幸の物語である日向神話、スサノヲとクシナダヒメ夫婦とその子孫オオクニヌシとヤソ神の物語である出雲神話において、論者は同じパターンの神話が3回繰り返されていることを見て、そのパターンを「夫婦の恋愛物語（A型神話）」＋「その子供の闘争物語（B型神話）」として取り出す。そして、兄弟闘争神話では、各神話の主人公は最初は負けるが、後には助太刀を得て勝つという2ラウンドの逆転劇からなることに注目する。そして、論者は、このような恋愛神話や兄弟闘争神話において現れているものは生命の根源への深い洞察であり、その洞察はエリアーデの言う「植物界の瞑想」に連なっていると考える。つまり、日本人の生業である灌漑稲作における「水と地の争い」が「生死の謎」と結び付き、灌漑稲作の世界観がいわば物語という形において生きられているのであると捉える。灌漑稲作では地は始め水に覆われ水に負けているかの如くであるが、地は水に覆われるからこそ、秋には再び豊かな実りとなって復活する。そのような季節変化・農耕サイクルに立脚して無意識のうちに形成された日本古来の死生観が物語の形をとって神代神話に流れ込み、具体的イメージとして生きられていると解釈する。古事記神代神話のうちに灌漑稲作によって養われた世界観の表現を読み取ろうとする本論文の企ては極めて大胆なものであるが、豊かな想像力と稲作世界の徹底した民族学的考察に裏打ちされた叙述によって大きな説得力を有するに至っている。

第二部「稲作世界の宇宙論」において、論者は生命の死と復活が稲作のサイクルに重ね合わされていることを示唆した柳田や坪井洋文が、春を復活の時期とし秋冬を死の時期とした解釈の誤りを指摘し、そのような柳田や坪井の間違ひは、麦という「冬作物栽培文化」に基づくヨーロッパの地中海文化を、稲という「夏作物文化」に安易に適用したことからくるもので、稲作文化においては春夏は死の時期であり、秋冬を復活の時期として捉えなければならないとする。そして、この観点から論者は、『稲の産屋』で穂積みを種の発芽のための産屋とした柳田の説を批判し、新嘗祭での稲の役割は種ではなく食糧であったことに注意をうながしている。また、「天水畑作」における天空神と「灌漑稲作」における雷神についての論述など、論者の見解は稲作文化の固有性の深い把握に基づいたもので注目すべきものである。

『古事記』の神代神話を「稲作世界の宇宙論」という観点から読み解こうとする本論文の試みは、従来の『古事記』の解説に新しい視野を開くものとして大きな意義を有するが、それは新しい手法ゆえの問題も孕んでいる。論者が『古事記』神代神話のうちに構造分析によって読み取りうるとする水霊と地霊の争いはあくまで証明不可能な一つの仮説であって、構造分析につきものの恣意性を免れてはいない。しかし、論者はこの手法に潜む難点を自覚することで、逆にその難点を利点へと転換してもいる。論者は、構造分析者が分析対象のうちに一方的に構造を読みとるところからくる恣意性を免れるために、構造分析から導かれた帰結を、民族学的コンテクストに照合し、共鳴させるという方法をとる。そこでは神話の構造と灌漑稲作という民族学的コンテクストとが相互に響きあうことによって、その構造分析は隠喩やアナロジーといった想像力に基づく共感的理解ないし解釈という性格をもっている。その点において、論者の構造分析はレヴィ・ストロースのそれとは異なっている。そこに本論文の固有の意義がある。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1999年12月27日、調査委員3名が論文内容とそれに関する事柄について試問した結果、合格と認めた。